

転倒と情報構造

橋本二郎*

(1979年7月6日受理)

1. 序 論

転倒は、文頭の位置に一定の要素が現われたときに生ずる。そのような一定要素にどのようなものがあるか、また、それらは統語論上、どのような条件を満たしていなければならないか、ということについては、橋本(1976)において考察した。それは、視点を文の内部に限定して転倒を論じたものであった。

しかしながら、そもそもなぜ転倒構文が用いられるのかという、転倒の根本にもかかわると思われる問題については、そこで論ずることはしなかった。この問題は、視点を文の内部にだけ置いておくことによって解決できず、文を越えた広がり、つまり談話、とかかわりを持つ諸特性を考慮に入れることによってはじめて解決されるものと思われる。

本稿では、転倒が、通例は文頭に現われることのない要素を文頭に置き、さらに、主語を後置するという二つの操作から成るものと考え、それぞれの操作について、どのような談話にかかわる特性が関係しているかを明らかにしたい。

2. 主語の後置

2.1.

英語における転倒は、二つの種類に大別して考えることができる。一つは、主語・助動詞転倒であり、もう一つは、主語・動詞転倒のタイプである。

まず最初に主語・助動詞転倒の場合を考えてみることにする。主語・助動詞転倒の代表的な例には次のようなものがある。

- (1) Under no circumstances must the switch be left on. (Quirk *et al.*, 1972, p. 949)
- (2) Only by this means is it possible to explain his failure to act decisively. (Quirk *et al.*, 1972, p. 949)
- (3) So high did prices rise that many people could no longer afford the necessities of life. (Zandvoort, 1969, p. 238)
- (4) By this means alone are we able to show which semantic representations belong to which sentences, and therefore ultimately how language works as a conceptual communication system – as a means for transmitting configurations of ideas by means of noises or marks on paper. (Leech, 1973, p. 178)

これらの例において、主語はいずれも助動詞の直後の位置に現われている。(4)に見られる転倒についても、それが、主語・動詞転倒ではなく主語・助動詞転倒として分類されることは、

* 岩手大学教育学部

本稿をまとめるにあたっては、桑原輝男東北大学教授ならびに東北大学英語学研究室の友人から貴重な助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表する。

文頭要素の中に、主語・助動詞転倒のトリIGGER (trigger) としての *only* と同義の *alone* を含んでいることから、また、以下の主語・動詞転倒に関する議論から明らかである。

主語・助動詞転倒は、文頭に、否定、*only*, *so* などを含む要素が現われたときに起こり、そうすると主語は義務的に助動詞の直後に置かれる。主語・助動詞転倒を含む文の持つ意味論上の効果を考えると、それは、否定などの特定要素を含む構成素を文頭の位置に置くことによっているものであり、主語を助動詞のうしろへ回すこと自体には、特にそのような効果は認められないであろう。すなわち、主語・助動詞転倒における主語の後置は、主語・動詞転倒などの場合と異なり、義務的であることから察せられるように、特別な意味をそこに認めることはできず、特定の要素を文頭の位置に置くことから生ずる、二次的副次的操作であると考えられる。

2.2

主語・助動詞転倒は、文頭の要素としてある特定のものが生じたとき、それに付随的に起こると考えられる。言いかえるならば、主語・助動詞転倒では、文頭に特定の要素を立てることがまずあって、転倒自体は、二次的派生的性格を持つものであるということである。

主語・動詞転倒の場合にはかなり事情が異なってくる。主語・動詞転倒においては、仮に転倒前の形を (5) とするならば、転倒後の形は (6) のように表わすことができる。

(5) NP_i (Auxiliary) V X

(6) X (Auxiliary) V NP_i

主語・動詞転倒においては、通例助動詞は現われないが、それがあつた場合、主語は助動詞のあとではなく動詞のあとに置かれる (cf. 橋本, 1976, p. 70)。

主語・動詞転倒の場合、特に注意すべき点は、転倒後に主語が占めることになる位置である。(6) にも示されているように、主語は、動詞のうしろに置かれるが、それは、同時に文末の位置にもなっているものであり、この点が、主語・助動詞転倒との決定的な違いであるように思われる。主語・助動詞転倒の場合であれば、主語は助動詞の直後の位置に移るが、この位置が同時に文末の位置になるということはある得ない。

(5) と (6) に関してもう一つ付け加えるならば、(5) と (6) とでは、NP_i と X の位置がちょうど入れかわっているということであろう。すなわち、転倒後に主語名詞句が移っていく場所は、転倒後に文頭要素となっている要素がちょうど転倒前に占めていた位置になっているということである。したがって、主語・動詞転倒を含む文においては、文頭要素であった主語名詞句と、一定の文末要素との相対的位置関係が逆転したかっこうになっている。ただし、結果的にそうであるとしても、主語・動詞転倒を (5) のような構造の NP_i と X を単に相互交換する操作と見ることはできない。X を文頭の位置へ移動する操作は、主語 NP_i を文末へ回す操作からは独立して存在するからである。

このように考えてくると、主語を文末に回すということにそれ自体の意味を認めることが可能であるといつてよいように思われ、それは、主語・助動詞転倒に見られる主語の移動とは本質的に異なる性格のものである。このことは、主語・動詞転倒の場合と異なり、主語・助動詞転倒は義務的であることから十分に推測される。主語・助動詞転倒においては、転倒形と転倒を含まない形との違いは、結局は、文頭要素の違いに帰せられると考えられるのに対し、主語・動詞転倒では、それに加えて新たな相違点が存在しているとみななければならないであろう。

主語・動詞転倒において主語が移っていく文末の位置はどういう位置かといえば、それは情報構造上新情報を表わす位置である。英語において、旧情報—新情報という順序が、情報配列上、最も無標であると考えることができ、そうすると、文末の位置は、無標の場合、新情報を表わしていることになる。ここでは、新情報、旧情報を、Chafe (1976, p. 30) にならって概略次のように定義することにする。新情報とは、話者が自分の述べることによって新たに聞き手の意識にのぼらせると考える情報であり、一方、旧情報は、発話の時点で聞き手の意識にのぼっていると話者が考える知識をさす。

主語・動詞転倒においては、したがって、その主語は新情報を表わしていると考えるのが自然な解釈であろう。逆の言い方をすれば、主語が新情報を表わしているから、文末の位置に移ったのだと考えられる。主語・助動詞転倒における主語の後置とは異なり、主語・動詞転倒における主語の文末への後置には、それだけの意味論上の裏づけが存在しているということになる。以下、主語・動詞転倒において、文末へ後置された主語が新情報を表わしているということを、用例によりながらみていくことにする。

まず次の例を考えてみよう。

- (7) Ahead sat an old man. (Quirk *et al.*, 1972, p. 748)
- (8) On the very top of the hill lives a hermit. (Quirk *et al.*, 1972, p. 748)
- (9) Before them lay miles and miles of undulating moors. (Zandvoort, 1969, p. 238)

これらの例においては、(7)、(8) では、不定冠詞つき名詞句が、また、(9) では、無冠詞の複数形の名詞句が主語として用いられており、これは、それらの名詞句が、それぞれの文においてはじめて言及されたものと解釈され、そのような名詞句は、上述の意味での新情報を表わしている。さらに、このように主語が明らかに新情報を表わしているとき、次のような形は許されないように思われる。

- (10) ? Ahead an old man sat.
- (11) ? On the very top of the hill a hermit lives.
- (12) ? Before them miles and miles of undulating moors lay.

文末に現われる主語は、しかしながら、(7)、(8)、(9) などの場合のように、いつも不定冠詞を伴っていたり無冠詞の複数形で用いられたりしているわけではない。

- (13) In the doorway stood my brother.
- (14) Over the bridge marched the soldiers.
- (15) Along the road roll the wagons.

これらの例においては、文末に現われている主語の *my brother*, *the soldiers*, *the wagons* は、いずれも定 (*definite*) 名詞句であり、したがって、言語的脈絡 (以下「文脈」と呼ぶ) あるいは言語外的脈絡 (以下「場面」と呼ぶ) から、聞き手にとって同定可能 (*identifiable*) なものである。

ある名詞句が、聞き手にとって同定可能であるということと、それが旧情報を表わすこととは必ずしも同じではない。旧情報を表わす名詞句は、総称的 (*generic*) な場合を別にすれば、同定可能な名詞句であると言ってよいように思われるが、その逆は必ずしも真ではない。すなわち、同定可能な名詞句であっても、さきあげた意味での新情報を表わすことはあり得る。な

ぜなら、定名詞句であっても、それが聞き手の頭の中にたえずあるというわけではなく、発話の時点で、その名詞句によって表わされるものを聞き手が考えていないような場合は十分あり得るからである。(13)～(15)の例もそれに似た状況において用いられるのではないかと思われる。

たとえば(13)の場合を例にとるならば、それは、**my brother**のことが話題となっていたような文脈あるいは場面においてよりは、むしろ、その逆の場合の方が自然な発話であると思われる。このことは、(13)と次の(16)を比べてみることによって、かなりはっきり示されるかもしれない。

(16) *My brother stood in the doorway.*

(16)においては、**brother**に特に強勢を置かない限りは、誰が立っていたか、ということを開き手に伝えようとする文ではなく、立っていた場所、あるいは、その場所も含めて、立っていたということを開き手に伝えようとする文であろう。これに対して、(13)の文においては、**my brother**は、話者が聞き手に伝えたい、したがって、聞き手の意識には、(13)を発する時点で、のぼっていないと話者が考える知識であると考えられる。そうだとすれば、(13)の**my brother**は、新情報を表わしていると言えるであろう。

もしも(13)に関して今述べたことが正しいとするならば、それは、次のような分裂文とどのような違いがあるのであろうか。

(17) *It was my brother who stood in the doorway.*

(17)は、聞き手がすでに、誰か戸口に立っていた人がいた、ということを知っていて、その誰かを明らかにするために用いられる例と考えられる。(13)と(17)は、主語の**my brother**が新情報であるという点では共通しているが、次のような点で違いがあるように思われる。すなわち、(17)では、**stood in the doorway**が旧情報と見なされるのに対して、(13)においては、そのようなことは言えないということである。

(13)においては、**stood**が旧情報を表わしているとは考えられないし、また、**in the doorway**については、それに旧情報とのつながりを認めることは可能であると思われるが、その場合には、のちにもふれるところがあるように、この句全体が旧情報を表わしているというよりは、その一部として旧情報を含んでいるという点においてであると考えられる。また、(13)のような例については、文頭の要素のうちに旧情報を示す部分を見い出せるとしても、主語・動詞転倒のすべてについて、このような一般化を述べることは困難であろう。もし一般化が可能であるとすれば、もう少し別の角度からなされるべきであると思われ、この点については、3で述べることにする。

これまでのところでは、主語・動詞転倒が行われるときの主語は、新情報を表わすと考えられる旨論じてきたが、逆に、新情報を表わす主語は必ず文末に置かれるかというところというわけではない。たとえば、Firbas (1966)には、次のような例が示されている。

(18) *The door opened, and a young girl came in.*

(19) *A dumb and grumbling anger swelled his bosom.*

(20) *A wave of the azalea scent drifted into June's face, ...*

(21) *A goldfinch flew over the shepherd's head ...*

それぞれの文において、不定冠詞を伴った名詞は新情報を表わしている。文頭の新情報を表わす主語は、最も典型的には、*appear*, *emerge* などのように出現を表わす動詞とともに用いられるとされる。

それでは、文頭の位置でも新情報を表わす主語が生ずることが可能だとすると、なぜ、さきに見てきたような主語・動詞転倒の例においては、主語が後置されるのであろうか。これは次のような理由によるのではないかと思われる。それは、すでにちょっとふれた通り、旧情報—新情報という順序が情報配列上無標であることから、旧情報にあたるものが存在する場合には、なるべく、この無標の情報配列に近づけようとするため、新情報を表わす主語を文末へ移動することになるのではないかということである。そして、(18)～(21)のように、その新情報を表わす主語が不定名詞句である場合には、そのような移動は必ずしも義務的ではないが、定名詞句の主語の場合は、それが新情報を表わすならば、それは、文末へ置かれることが義務的であるように思われる。

3. 転倒と文頭要素

2では、主語・動詞転倒構文において、主語が文末に置かれることの意味を考察してきた。

主語の後置は、これまでみてきた例からも明らかなように、一方において、文頭に一定の要素が生ずることを義務的に必要とする。主語のみを後置することは、次の(22)にも示される通り、英語においては許されない。

(22) *Lives on the top of the hill a hermit.

つまり、主語を文末に置くことが可能になるのは、主語以外の要素を主語にかわって文頭に置くという前提条件が満たされている場合であることになる。それでは、その文頭に置かれる要素はどのような理由によって、その位置へ移ったと考えられるのであろうか。そのような理由としては、複数のものが存在しうらと思われるが、ここでは、そのようなもののうち、比較的是っきりしていると思われる場合について指摘しておきたい。

文頭の位置というのは、先行する文あるいは談話との関係という点からみれば、それとの、いわば、接点であり、その意味では、先行する文や談話とのつながりを持たせるのに最も適した位置であると言える。したがって、この位置に、そういう連結的な働きを持った要素が現われることが多いであろうことは十分予想される。そして、このことが、転倒を含む場合においても、同様に予測される。転倒を支える原理の一つが、連結的役割を果たす要素を文頭に置くことにあるということを以下において考察することにする。

そのような要素としてまず頭に浮かぶのは、先行する文に含まれている要素を指示 (*refer*) するものである。たとえば、指示代名詞や定冠詞を付した名詞などによる場合がある。

(23) To this belong all the varieties of silent speech and of normal speaking. (Sapir, 1921, p. 18)

(24) (=11) Before them lay miles and miles of undulating moors.

次も類例と考えられる。

(25) Such a radical-word, to take a random example, is the Nootka word *hamot* "bone." Our

English correspondent is only superficially comparable. *Hamot* means "bone" in a quite indefinite sense; to our English word clings the notion of singularity. (Sapir, 1921, p. 28)

(25) で、our English word とは、先行する部分において言及されている bone という単語のことをさしている。また、主語・動詞転倒の例ではないが、次のような転例の例においても同様のことが観察される。

(26) By 'complement' is understood all nominal elements other than the subject: direct object, indirect object, cognate object and adjectival and nominal complement. (Halliday, 1973, p. 140)

(26) は、(27) の complements という用語の説明のために加えられた注釈である。

(27) But while there are very few complements, there is an abundance of adjuncts [44] (Halliday, 1973, p. 125)

さらに類例をいくつか下にあげておく。

(28) Corresponding to these readings is a difference in stress. (Bresnan, 1971, p. 268)

(29) ... from this may be derived the transferred meaning 'causing or evoking inner state X' (Leech, 1974, p. 225)

(30) Tied in with these two views of trace theory is the following question. (Lightfoot, 1976, p. 560)

(31) Morgan argues that we can explain this fact by supposing that underlying *kill* is the phrase marker *cause to die*, ... (Chomsky, 1972, p. 149)

(32) To the principle of avoiding structures like (b) and (c) in favour of structures like (a) can be added a second syntactic principle, which is that if an element of the sentence receives focal emphasis as 'new information', it should occur towards the end rather than the beginning of the sentence. (Leech, 1973, p. 198)

(23) から (32) までの例はすべて、先行する文脈を指示する要素を文頭の位置に含むものであった。しかしながら、転倒文のなかには、文頭の位置に、指示的という点では同じであっても、先行する文脈を指示するのではなく、場面に関する指示を表わす要素を持つものもある。そして、その場面にかかわる指示は、上でみた文脈に関する指示的語句の場合と同じく、少くとも聞き手にとっては、明示的なものでなければならぬように思われる。たとえば次のような例を考えてみよう。

(33) Throwing the hammer is champion William Anderson, who, when he's not winning trophies, is a hard-working shepherd in the Highlands of Scotland. (Quirk *et al.*, 1972, p. 949)

(34) Buried here lies the producer of *A Night at the Opera*.

(35) Examined today and found in good health was our nation's first executive. (Emonds, 1970, p. 22)

これらの例において、(33) の the hammer, (34) の here, (35) の today は、それぞれの発話が用いられる場面から、唯一的に決定可能な要素である。次のような例についても同じことが観察される。

- (36) Away goes the servant.
 (37) There comes the station bus!

すなわち、これらの例においては、awayあるいはthereによって示される方向や場所が聞き手にとって説明されるまでもなくはっきり定位されていなければならない。

文頭の要素の中に、先行する談話を指示する要素や場面を指示する語句が含まれていないときは、これまでみてきたような転倒構文を用いることは許されない。たとえば、(40)は、物語を始める文としては不適當であり、それに対して、(39)におけるように、Xanaduについて先行する文中に言及がある場合には、(38)のような形が可能となる (Bolinger, 1977, p. 111)。(39)においては、聞き手は、Xanaduがどういう場所であるのか、わかっているものと考えられる。

- (38) In Xandau lived a prince of the blood.
 (39) What lives in Xanadu? - In Xanadu live all manner of crawly creatures.

つまり、Xanaduに関して聞き手が何らの予備知識を持っていないと話者が考える場合には、(38)のような構文は用いられず、そのようなときには、thereが利用されるとBolingerは考える。

- (40) In Xanadu there lived a prince of the blood.

すなわち、(40)のような文におけるthereは、話者と聞き手との間に共通理解の部分が欠けているときに、その穴を埋める働きを持っているということになる。

最後に、be動詞の補語にあたるものが文頭の要素となって、転倒が起こっている例をみておくことにする。

- (41) Also quite common are labial and palato-alveolar fricatives. (Schane, 1973, p. 17)
 (42) Similarly bizarre are corresponding sentences that have not undergone Tough Movement (Lightfoot, 1976, p. 569)
 (43) More important for our present concern is the tendency for a dictionary definition to go beyond the explanation of the mere sense of an item. (Leech, 1973, p. 204)
 (44) Most obvious is the establishment of definiteness through prior mention in the discourse. (Chafe, 1976, p. 40)

これらの例においては、いずれも、先行する文あるいは談話とのつながりを、文頭の要素に読みとることが可能である。(41)、(42)においては、also, similarlyがそのような接続的機能を担った語であり、また、(43)、(44)では、比較級、最上級の使用にそれを認めることができる。これらの比較級や最上級の、比較の対象や範囲は、やはり、先行する文脈に求められるものである。

(41)~(44)の例を情報構造の観点からながめるとどうなるであろうか。これらの例における文頭の要素、also quite common, similarly bizarre, more important for our present concern, most obviousは、いずれも、新情報を表わしていると考えなければならない。また、一方において、後置された主語は、やはり、新情報を表わしていると考えられる。そうすると、これら

の例においては、文頭要素も主語もともに新情報を表わすということになる。そうであるならば、なぜわざわざ転倒形が使われるのであろうか。

これは次のように説明されるのではないかと思われる。たとえば (41) において、**also quite common** は新情報を表わすとしても、その中に含まれる **quite common**, あるいは **common** は先行する文脈ですでに言及されている内容である。そうすると、全体としては新情報であっても、その中に、先行する文脈で既述された概念を含み持つものは、そのような概念を含んでいない、新情報を表わす要素より文頭に近い位置に置かれるということがあるのではないだろうか。

あるいは、また別の観点から考えてみることも可能かもしれない。それは、(41)~(44) の文頭要素、つまり、**also quite common** などは、すべて、先行する文脈が存在してはじめて成立し得るものである。**also, similarly** などが談話の先頭にある文の中に現われることは不可能である。そうすると、これらの文頭要素は、先行する文脈あってこそ意味をなすという点において、いわば、文脈依存的であると言うことができる。一方、(41)~(44) の文において後置された主語は、同じ新情報を表わしているとは言っても、決して文脈依存的ではない。とすると、これらの文は、文脈依存的要素を文頭に置き、文脈依存的でない要素を文末に置いた文ということになる。

文脈依存性という概念でもって、これまで見てきた例を考え直してみると、たとえば、(23)~(32) の文に見られる文頭要素は、いま言った意味で文脈依存的な語句を含んでおり、したがって、文頭要素全体も文脈依存的であると言うことが可能である。

さらに、依存性という概念でもって、(33)~(37) のような例を考え直してみるならば、これらの例に含まれる文頭要素は、(23)~(32) の場合のそれのように、文脈に依存しているのではなく、こんどは、場面に依存しているということがわかる。すなわち、それらの要素、あるいは、それらの中に含まれている要素、たとえば (36) であれば **away** は、それらの要素を含む文が用いられている場面に言及してはじめて意味をなすものである。したがって、これらの要素は、文脈依存的に対して、場面依存的であると言うことが可能である。

4. 結 論

以上の考察から、転倒現象を、脈絡依存性 (contextual dependency), すなわち、文脈依存性あるいは場面依存性という角度から、統一的に説明することが可能になってくるのではないかと思われる。それは、転倒現象は、脈絡依存的な要素を文頭に、あるいはできるだけ文頭近くに置こうとした結果生ずる一つの場合であり、また、それに加えて、主語が脈絡依存的でない場合に起こると言ってよいように思われる。

旧情報、新情報と、ここで言う依存性との関係は、次のように言うことができる。旧情報は、脈絡依存的であり、新情報は、脈絡依存的ではない。逆に、脈絡依存的でなければ、新情報を表わすが、脈絡依存的であれば旧情報を表わすかといえば、そうとは限らない。文脈依存的であっても旧情報を表わしているとは考えられない例としては、(41)~(44) の文頭要素をあげることができる。また、(23)~(26), (28)~(32) についても、文頭の前置詞句あるいは分詞句は、文脈依存的な語句をその中に含んでいるという意味で、全体としてやはり文脈依存的であるが、一方で、これらの句は、全体としてみるならば、新情報を表わしていると考えなければならぬと思われ、したがって、これらも、文脈依存的であっても旧情報を表わしてはいない例と言

えよう。場面依存的であって旧情報を表わさない例としては、(33)～(37)のような文の文頭要素をあげることができる。

新情報は脈絡依存的であるときとそうでないときがあると述べたが、それは、たとえば、名詞句において、不定名詞句は脈絡依存的でない形での新情報であり、定名詞句などが新情報を表わしていると考えられる場合、たとえば(13)～(15)には、それは脈絡依存的ということになる。旧情報を表わす定名詞句と新情報を表わす定名詞句は、脈絡依存的であるという点では同じであると考えられるが、もし脈絡依存性ということに程度の差を認めることが可能であるならば、旧情報を表わす定名詞句の方が、新情報を表わす定名詞句よりも脈絡依存性の度合いが大きいと言えるのではないだろうか。脈絡依存性の度合いをどんな基準で測るのかは大きな問題であるが、たとえば、文脈依存性の場合であれば、ある要素とそれが依存する文脈との遠近などが当然関係してくるだろうと思われる。

以上をまとめるならば、転倒は次のような場合に起こるということになるであろう。まず、主語・動詞転倒などのように文末への主語の後置を含むものについては、主語以外のものが脈絡依存的であり、主語が依存的でない(不定名詞句の場合)か、脈絡依存的であれば(定名詞句の場合)、その度合いが、主語以外のそれより低いときに起こると考えてよいように思われる。

主語・助動詞転倒の場合はかなり事情が異なってくる。この転倒においては、脈絡に依存しない特定の要素を文頭の位置に置くことによって起こると言うことができ、この非脈絡依存性によって、この転倒を含む文が持つ強調の効果が生み出されるものと考えられる。それに対して、主語・動詞転倒などの場合には、脈絡依存的な要素が文頭に生じ、それによる強調は見られないように思われる。

References

- Bolinger, D.L. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.
- Bresnan, J. 1971. "Sentence stress and syntactic transformations," *Language* 47, pp. 257-281.
- Chafe, W.L. 1976. "Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view," in Li, C.N. (ed.) *Subject and Topic*, New York: Academic Press.
- Chomsky, N. 1972. "Some empirical issues in the theory of transformational grammar," in Chomsky, N. *Studies on Semantics in Generative Grammar*, The Hague: Mouton.
- Emonds, J. 1970. *Root and Structure-preserving Transformations*. Reproduced by the Indiana University Linguistics Club.
- Firbas, J. 1966. "Non-thematic subjects in contemporary English," *Travaux Linguistique de Prague* 2, pp. 239-256.
- Gary, N. 1976. "A discourse analysis of certain root transformations in English." Reproduced by the Indiana University Linguistics Club.
- Halliday, M.A.K. 1967. "Notes on transitivity and theme in English, Part 2," *Journal of Linguistics* 3, pp. 199-244.
- Halliday, M.A.K. 1973. *Explorations in the Function of Language*. London: Edward Arnold.
- 橋本二郎. 1976. 「転倒の条件」岩手大学教育学部研究年報第36巻
- Leech, G. 1973. *Semantics*. Harmondsworth: Penguin.
- Lightfoot, D. 1976. "Trace theory and twice-moved NPs," *Linguistic Inquiry* 7, pp. 559-582.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- Sapir, E. 1921. *Language*. New York: Harcourt.
- Schane, S. 1973. *Generative Phonology*. New York: Prentice Hall.
- 安井 稔. 1978. 『新しい聞き手の文法』東京: 大修館
- Zandvoort, R.W. 1969. *A Handbook of English Grammar*. 東京: 丸善

Inversion and Information Structure

Jiro HASHIMOTO

There are two operations involved in subject-auxiliary or subject-verb inversion: one is the preposing of certain constituents to sentence-initial position and the other is the postposing of subject to the position immediately following the auxiliary or the verb.

In the case of subject-auxiliary inversion the main and probably the only function is to set up constituents from a rather restricted set in sentence-initial position and the placing of subject after the auxiliary seems to be a more or less mechanical, syntactic procedure with no substantial semantic import.

In the case of subject-verb inversion, the picture is quite different. First, it is to be noted that the position subject comes to occupy is not only after the verb but also sentence-final. The subject in this position can be shown, as expected, to carry new information. Second, the constituent appearing in sentence-initial position contains in it some element which has the function of relating it explicitly to the prior linguistic context or to the situational, *i.e.* extralinguistic, context. Such elements can be said to be dependent on context, linguistic or situational, because they receive their unambiguous interpretation only by referring to the context in which they are used. Thus, the function of subject-verb inversion seems to be that of putting context-dependent elements towards sentence-initial position and context-independent or relatively context-independent subjects in sentence-final position.